



岐阜で得た 貴重な経験

岐阜県国際課国際交流員

Maiko Carole Gobbi

マイコ・キャロル・ゴビ

「おめでとうございます。あなたは岐阜県庁国際課に配属されることになりました」との通知書を見たとき、「岐阜県?!」と受かった喜びと同時に、なぜ岐阜になったんだろうと驚きました。岐阜県といえば、小京都とも呼ばれている高山市の古い町並み、そして世界遺産に登録された「白川郷」とその伝統的な合掌造り家屋…。岐阜への配属が決まるより前に、偶然にもパリを訪れた岐阜市長の講演を聞いたことがあったのです。一度も訪れたことのない土地ではありましたが、何か不思議な縁を感じました。

岐阜県は在日フランス大使館とともに、2007年に持続可能なプログラム「フランス岐阜・地域交流プログラム」を設立しました。現在の岐阜県知事は過去にフランスの著名な行政大学ENAに留学され、現在の駐日フランス大使とは同期生のこともあり、フランスとの交流に力を入られているのです。

このプログラムの一環として、2008年にフランス人CIRを国際課に受け入れることになり、私がその初代CIRという立場になりました。前任者がいなかったため少し不安なこともありましたが、オープンな雰囲気職場環境に恵まれ、感謝の気持ちでいっぱいです。

岐阜に着いて、職場で辞令交付式を行った数日後、最初の仕事は在京大使やVIPの岐阜観光ツアーの通訳でした。配属直後に大きな仕事を任せられ、大変緊張しましたが、初めて訪れる白川郷と高山市の美しさは想像以上に素晴らしく、私の緊

張をほぐしてくれました。

また岐阜県は、清流長良川や下呂温泉、豊かな自然をはじめ、関市の刃物、美濃焼きや和紙、郡上市の食品サンプル作りな



パリ観光博覧会にて（さるぼぼと一緒に）

ど産業や伝統工芸にも恵まれています。岐阜県について少しずつ詳しくなっていくとともに、観光パンフレットを翻訳したり、2カ国語のブログに岐阜を紹介したり、さらには毎年パリで開催されているMAP国際観光博覧会に2度参加し、パリの旅行会社へ岐阜県をPRするなど、観光誘客にも貢献することが出来ました。

県の「フランス岐阜・地域交流プログラム」では、観光分野以外も多岐にわたるプロジェクトが行われています。たとえば、岐阜へのフランス企業の誘致のサポートや、美術館の学芸員同士の交流、大学間交流など様々です。

その中で私の仕事はもちろんプロジェクトのサポートですが、日仏コーディネーターがいなくても交流が成り立っている場合や大使館職員が仲介をすることもあります。そこで、既定の交流プログラム以外にも私に出来る新しいプロジェクトを作ろうと考えました。

まずはJETプログラムのCIRの重要な仕事の一つである、県民に近い草の根レベルの文化紹介活



ニューカレドニアの文化紹介イベント

動を行うことから始めました。私はフランス領であるニューカレドニアで生まれ育ったので、岐阜県民にフランスの文化

の多様性を知ってもらう機会として、ニューカレドニアの文化紹介に取り組みました。

学校訪問をしたり、市の国際交流協会の企画に参加したりして、パワーポイントのプレゼンテーションのほかに、ダンス体験、伝統料理の試食やフランス語の講座も行いました。また、ニューカレドニアに対しては、日仏コミュニティや領事館を通して、岐阜県のPRを続けています。

こうした交流をきっかけに、国際課の職員や岐阜の日仏協会などの協力のもと、ニューカレドニアの高校生の岐阜での修学旅行や、逆に岐阜の中学生をニューカレドニアのスポーツイベントに参加させるといったプロジェクトを実現することが出来ました。

そして、もちろんフランス本土との交流にも積極的に関わっています。最近では2年前から少しずつ企画してきた「漫画」をテーマにした大学間交流が本格的に動き始め、今年初めてフランスからの留学生の受け入れが行われることになりました。このプロジェクトも今後「フランス岐阜・地域交流プログラム」の一環として組み込まれることとなりました。

このように新しいプロジェクトの調整もすることができた一方で、ミスをしたり、思いがけない困難にぶつかったりもしましたが、それは毎日のモチベーションに繋がり、やり甲斐のある仕事に充実感を感じています。

また、もう一つ私が大きくかかわっている県の事業は、フランス語圏であるモロッコ、ウジュダ・アンガッド府との交流です。乾燥地であるモロッコの緑地化をサポートするため、JICAの事業を活用して、岐阜県の国際園芸アカデミーにモロッコ人研



岐阜県知事とパリの漫画専門学校の留学生との面談を逐次通訳

修生を3年連続で受け入れることになっています。私は研修生をはじめウジュダ・アンガッド府との連絡調整をする一方で、次期交流分野のプロジェクトマネージャーとして働いています。これは私にとって新しい文化を学びながら日本との調整を行う刺激的で有意義な体験となっています。

岐阜で学んだことはすべて宝物です！母が日本人の私は、日本に留学したこともあったのですが、日本で働くことは初めてでした。JETプログラムのおかげで県庁の国際交流事業に関わることができ、現在の日本社会のことも、母国（フランスとニューカレドニア）のことも、そして自分自身のことまでたくさん学ぶことが出来ました。また、岐阜県で暮らして、いろいろな人と出会い、一生忘れられない貴重な思い出をつくりました。

これからの人生の大きな土台となる岐阜での経験をさせていただいたことに、心から感謝をしています。



1983年生まれ、フランス領のニューカレドニア出身の日系2世。パリの東洋言語文化大学INALCOで日本語を専攻し、修士課程を取得。日本の国費留学生として、島根大学で1年間勉強し、2008年にジェットプログラムの国際交流員として岐阜県庁国際課に着任。趣味は乗馬、ダンス、写真、映画鑑賞。

Maiko Carole Gobbi



小屋の中に

青森県つがる市教育委員会外国語指導助手
Hal Edmonson
ハル・エドモンソン

津軽半島では、桜前線が北上すると、この時期に芽を出すのは草花だけではありません。降り積もった雪が溶けて春泥となり、ジョギングができる気候へと移る頃、生き物の気配も戻ってきます。毎日ジョギングをしながら、田んぼに戻る農家の人を見たりして、運動場からは野球チームの掛け声が聞こえてきます。数カ月及ぶ零下の気温と降り続く雪が去った後に、このようなことを味わえるのはうれしいのですが、私が冬の終わりを知るのはこれだけではありません。青森では、ねぶた祭り用の小屋が建ち始めるのを見て、春が本当にやってきたと感ずるのです。

2009年の夏に青森県つがる市に来る前に、ねぶた祭はもとより、青森県の歴史や文化なども全く知りませんでした。青森県は、5年前にホームステイした和歌山県とだいたい同じだと予想していました。しかし、青森空港に到着したとたんに、その予想は完全に間違っていることに気づいたのです。空港の荷物受取り場に歩いて行くと、目に入ってくるもの全部が、りんごをテーマにしたポスターやTシャツ、りんご関連の商品を売るお店でした。そして中央ホールを、りんごの形をした大きなマスコットが歩いているのを見て驚きました。これらのことから、前の日本での経験は無意味だったのだろうと思いました。

つがる市に来てから二日目の夜に、まだ会ったことのないALTから「五所川原市のねぶた祭りに行かないか」と誘われました。彼はわざわざ私ともう一人のALTを迎えにきてくれました。彼はその

後用事があるということなので、祭りの後に会う場所を決めてから、祭りがよく見える場所について聞きました。彼は「どこでもいいよ」との返事で、ちょっと変な答えだと思いました。歩道が混んでいたため、私たちは喫茶店の前に立っていましたが、そこから見えるものは限られていました。

お祭りが始まってすぐ、友人の発言の意図がわかりました。予想していた小さな山車と違い、5層の大きな彫刻が眼に入ってきました。それは明るく輝いていて、近くの建物の窓に映っていました。このようなものを見るのは初めてだったので、とても驚きました。山車を囲む数百人の踊り手や太鼓をたたく人を見て、この祭りを作り上げている人たちの誇りをまざまざと感じました。

青森には、五所川原市の「立ちねぶた」以外のねぶた祭りがあります。前任者のALTに、つがる市ねぶた祭りに参加しているグループを紹



まだ小屋に置いてある完成したばかりの丸彫り（祭り初日）



制作中の23年度の丸彫り

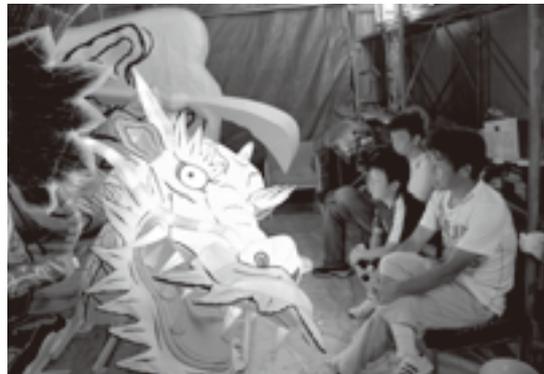
介されました。「^{やちなか}菟中ねぶた愛好会」の本部は、私の家からあまり離れていない田んぼにブルーシートと丸太足場でできた小屋にあります。

初めて行った時に、ドアを叩いたところ、鋭い声で「はなが〜!」という返事が来ました。ドキドキしながらドアを開けました。小屋の中にいた10人は、びっくりした顔をしていました。「初めまして。私はエドモンソンハルと申します。よろしくお願いします」と言って、教えられた方法のように一礼しました。2、3秒間の沈黙のあと、全員が笑い始めました。そして、ある背の高い人に手招きされました。「ハル、おそいじゃ!もつ、けっ!」と言いました。私がこの辺の難しい津軽弁が分からなかったため、彼はもう一度「もつ!けっ!」としゃべりました。それでも意味が分からなかったため、彼のすぐ隣の人は咳払いして、バーベキューで焼いている肉を指差しながら、「もつ!イート!」と言って、私を座らせました。

飲んだり、話したりする間に、ねぶた祭りについて知ることができました。この辺の全部の町に、それぞれのねぶた祭りがあります。例えば、一番有名な青森市ねぶた祭りは伝統的な中国の物語を現す丸彫りであり、その一方、弘前ねぶたの丸彫りは扇子みたいな形をしています。やはり、時間や資金によって、大きさも複雑さも違います。ねぶたの由来については、今でも学者と歴史家により論争が行われています。

菟中愛好会のメンバーはその晩につがる市ねぶた祭りを終了したばかりでしたが、翌月に行われる「馬ねぶた」の準備を次の日にするつもりだと教えてくれました。馬ねぶたは、普通のねぶた祭りと同じですが、伝統的な物語の代わりに、馬の丸彫りを作ります。普通のねぶた祭りに比べると、馬ねぶたは小さくて、ふるさつを感じさせることを教えられました。帰る前に、手伝いにこないかと誘ってくれました。

まもなく、私は愛好会に加わりました。毎晩小屋に行って、遅くまで作業することになりました。最初は、和紙ですごく大きい馬の皮を作りました。簡単そうに見えますが、適切な丸さが大事で、狭くて貼りにくい所がいっぱいあるので、本当に難し



遅くまで作業する菟中ねぶた愛好会のメンバー、一時休憩中

いです。何回も失敗してやり直している間に、「がんばれ」という言葉の意味が深く分かってきました。しかし、もっとも重要なのは、メンバーの皆がこの作業を自分たちの仕事として、とても誇りに思っていることです。私はまだ津軽弁に慣れていなかったのですが、ねぶた職人の信念(アイデンティティ)は、彼らの友情や作品に命を与える職人魂にあることが分かりました。彼らは、ねぶたを通して、町や地域を代表しているだけでなく、自分自身よりはるかに大きい伝統を担っているのです。

都会の生活を求めて若い人たちがこの地を去っていくにつれて、津軽弁を話す人が毎年減ってきて、ねぶたの作り方が分かる人も少なくなってきました。私たちの元気なねぶた愛好会でさえ、30歳以下のメンバーが2、3人しかいないので、ねぶたの将来を少し心配しないではられません。それから、ねぶた職人は自分の文化を守る責任を負っています。大変な仕事ですが、やりがいがあることに間違いありません。

地域の人たちが与えてくれた多くの機会の中で、このすばらしい仕事を手伝えたことは最高な名誉かもしれません。



アメリカのウィスコンシン州のマディソン市出身。今年2年目で、青森県つがる市で外国語指導助手として勤めている。カルトン大学卒業生で、学生の時に宗教を専攻しながら、日本語も勉強していた。仕事以外は、菟中ねぶた愛好会のメンバーをしたり、写真を撮ったり、アジアを旅行したりしている。JETプログラムを終えたら、

神学校に入学して、宗教の勉強を続ける予定。

Hal Edmonson

Ma précieuse expérience à Gifu

« Félicitations, vous êtes affectée dans le bureau des relations internationales du gouvernement de Gifu. » « Gifu ?! ». J'ai sursauté autant de surprise que de joie à la lecture de cette annonce. Gifu, sa ville de Takayama appelée petite Kyoto pour les quartiers aux maisons anciennes, mais aussi son village de Shirakawago inscrit au patrimoine mondial de l'Unesco pour ses toits de chaume... Avant même de connaître mon affectation, j'avais déjà eu par hasard l'occasion d'assister à une conférence du maire de Gifu, venu à Paris dans l'année. Bien que n'étant encore jamais allée dans cette région, j'avais la sensation d'avoir déjà un lien particulier avec elle.

En 2007, le gouvernement de Gifu a établi un accord avec l'Ambassade de France au Japon pour mettre en place un programme d'échange durable entre la France et le département de Gifu. Le gouverneur actuel de Gifu, en tant qu'ancien élève de l'École Nationale d'Administration à Paris et issu de la même promotion que l'Ambassadeur de France, s'est engagé à promouvoir les échanges avec notre pays. C'est dans le cadre de ce programme qu'en 2008 le poste de CIR français a été créé au sein du service des relations internationales et que j'ai eu l'honneur de l'inaugurer. N'ayant pas de prédécesseur, j'étais parfois un peu désorientée au début mais j'ai eu la chance de bénéficier d'un environnement professionnel très ouvert.

Quelques jours après mon arrivée à Gifu et la cérémonie protocolaire de nomination qui a suivi, la première tâche que l'on m'a attribué a consisté en l'interprétation d'un tour guidé pour un groupe d'ambassadeurs et de VIP venus de Tokyo.

J'étais un peu stressée par cette première et lourde responsabilité mais la ville de Takayama et le village de Shirakawago que je voyais pour la première fois ont dépassé mes espérances par leur beauté, ce qui a tout de suite apaisé mes doutes. Gifu est doté de trésors naturels tels que les eaux limpides de la rivière Nagara et les sources thermales de Gero, et est également riche d'un savoir-faire artisanal et industriel : coutellerie de Seki, papier traditionnel japonais et céramique à Mino, production d'aliments factices pour vitrines de restaurants à Gujo, et bien d'autres encore. Tout en découvrant petit à petit les richesses de la région, j'ai pu contribuer à leur promotion en traduisant des dépliants touristiques en français et en créant un blog bilingue sur mes visites. Je suis aussi passée par des agences de tourisme françaises à l'occasion du salon du tourisme MAP organisé chaque année à Paris, auquel j'ai pu déjà participer deux fois.

Mis à part le tourisme, dans le cadre du programme officiel, il existe d'autres projets dans divers domaines: support aux implantations des entreprises françaises, échanges entre conservateurs de musées, échanges académiques, etc... Mon rôle est bien sûr d'apporter mon soutien à ces échanges, mais il arrive que ce soit l'ambassade qui s'en charge ou tout simplement que l'échange se déroule sans besoin de coordinateurs français. J'ai donc longuement réfléchi à la création de nouveaux projets que je pourrais mettre sur pied et coordonner moi-même.

J'ai tout d'abord commencé par l'une des activités importantes de tout participant du programme Jet: la participation à des manifestations culturelles pour se rapprocher des habitants.

The Koya

On the Tsugaru Peninsula, flowers are not the only things that sprout from the ground as the cherry blossom front sweeps its way north. Every year, as the dense snow melts into mud and jogging weather returns, signs of life return in unexpected ways. On my frequent runs, I see the workers returning to the rice fields, and hear the school baseball teams' shouts from the practice fields. While the feeling is certainly welcome after months of sub-zero temperatures and constant snowfall, these things no longer signify the end of winter to me. Here in Tsugaru, it is only when I see the Nebuta Huts that spring truly arrives.

Before I came to Aomori in the summer of 2009, I knew nothing about its history or culture—much less the tradition of Nebuta. In fact, I expected it to be roughly the same as Wakayama Prefecture, where I had participated in a homestay program five years earlier. However, the moment I arrived at Aomori Airport, I realized that my preconceptions of what my time in Aomori would be were woefully misguided. As I walked to the baggage claim, everywhere I looked were posters of apples, stores for apple-related products, t-shirts with references to Aomori apples, and, of course, an unsettlingly large apple-shaped mascot trolling the concourse.

As if to prove my point, on my second night in Tsugaru City, however, I received a telephone call from another ALT whom I had never met. Somehow, he had looked up my telephone number, and called to invite me to the nearby Goshogawara Tachineputa Festival. Even though he was walking in the parade with his own ensemble, he still took the time to come and pick up me and another new

ALT from the train station. After making plans to meet up after the festival, I asked him where would be a good place to view the action from. "Oh, it doesn't matter—anywhere will be fine" he replied before hurriedly rushing off to join his group. Seeing as the streets were already crammed, we resigned ourselves to standing in front of a coffee shop, and the limited views this would entail.

As soon as the parade began, however, I understood the reason for my new friend's remark. Unlike the small floats I'd anticipated, a five-storey-tall sculpture soon rolled into view, its bright lights reflecting in the windows of nearby buildings. I had simply never seen anything like it. The sheer effort that must have gone into building it was staggering. And in the hundreds of dancers and taiko drummers that surrounded each float, the pride they felt in their creation was palpable.

Fortunately for me, Goshogawara's Tachineputa was hardly the only game in town. Through my predecessor, I was lucky enough to be introduced to a group that participated in Tsugaru City's own Nebuta festival. The Yachinaka Nebuta Group headquarters can be found in a rice field not far from my house, in a brightly lit hut made of tarps and painters scaffolding. With the sounds of power tools and hushed voices coming from inside, it's easily one of the more intimidating locales in the area. On my first visit, when I knocked the on door I was met with a sharp "*hanaga!*"—"Come in!", in the impenetrable local dialect, Tsugaru-ben. Nervously, I opened the door to find ten faces starting directly at me. Just as I had been taught, I went through my formal self introduction, and



Maiko Carole Gobbi

Comme je suis originaire de Nouvelle-Calédonie, j'organise des séminaires sur ce sujet, afin de faire connaître aux Gifusiens la diversité de la culture française. Je fais des présentations sur power point, mais aussi des cours d'introduction au français, de danses ou de cuisine traditionnelle, à l'occasion de visites d'écoles ou en participant aux activités des associations de relations internationales municipales. D'autre part, je prends régulièrement contact avec les communautés japonaises et le consulat japonais de Nouvelle Calédonie pour présenter mes activités à Gifu. Puis petit à petit, grâce à ces premiers contacts et au soutien de mes collègues et des associations franco-japonaises de Gifu, j'ai abouti à la réalisation de deux projets : l'accueil d'une classe de lycéens calédoniens à Gifu et à l'inverse, l'envoi d'un groupe de collégiens japonais en Nouvelle Calédonie pour la participation à un stage sportif.

Je m'intéresse aussi bien sûr aux échanges avec l'Hexagone. Un échange universitaire sur le thème du manga, projet sur lequel je travaille depuis deux ans, s'est concrétisé cette année par l'accueil d'un premier groupe d'étudiants français sur un semestre. Ce projet en essai aboutira, si tout se passe bien, à un contrat d'échange universitaire et sera intégré à l'avenir dans le programme officiel. C'est en m'occupant de la coordination de nouveaux projets comme ceux-là que, malgré les erreurs commises et les obstacles inattendus parfois rencontrés, ma motivation s'accroît de jour en jour et le travail mené à Gifu me procure un réel sentiment d'accomplissement personnel.

Enfin, je ne peux pas conclure cet article sans parler d'un

autre domaine de travail auquel je consacre également du temps : la coordination des échanges avec le gouvernement d'Oujda-Angad au Maroc. Gifu participe à un programme de la JICA pour contribuer à la lutte contre la désertification du Maroc, en accueillant des spécialistes marocains en stage à l'Académie Internationale d'Horticulture de Gifu chaque année pendant trois ans. Je m'occupe de coordonner les deux gouvernements concernant les aspects pratiques du stage et travaille sur l'établissement d'un nouveau thème d'échange pour l'avenir. Découvrir le Maroc et sa culture, et la mettre en contact avec les Japonais est pour moi une expérience très stimulante et enrichissante.

En résumé, je dirais : que de choses apprises et à apprendre encore ! Ma mère est japonaise, et j'ai étudié une année dans une université japonaise, mais c'était la première fois que je travaillais au Japon. Grâce au programme Jet qui m'a permis de me plonger dans les activités d'échanges internationaux d'une collectivité locale japonaise, j'ai non seulement découvert des aspects de la société japonaise actuelle que je ne connaissais pas, mais aussi appris beaucoup de choses sur mon pays d'origine (France et Nouvelle-Calédonie) ainsi que sur moi-même, mon identité, mon appartenance... Mon séjour à Gifu m'a permis de rencontrer toutes sortes de personnes, de me lier d'amitié avec certaines et de passer de moments inoubliables. Je réalise chaque jour la chance que j'ai d'avoir pu vivre cette précieuse expérience qui représente un atout solide et un tremplin pour ma vie future.

フランス語

Hal Edmonson

presented my hosts with a deep bow. There was dead silence for about two or three seconds before everyone present started laughing and applauding. Then, a tall man near me cleared his throat and said "Haru, Osoja! Motsu, Ke!". When my lack of Tsugaru-ben comprehension failed me, he gave it one more brave attempt—this time slower, and much louder: "Motsu! Ke!" At my blank expression, the man next to him pointed emphatically at the pork innards roasting away on the barbecue and shouted "MOTSU! EE-TO!", and then nudged me into an open spot on the bench.

As we drank and talked our way through the evening, I learned that nearly all the cities in Aomori have their own unique Nebuta festivals. For instance, Aomori City Nebuta Festival—arguably the most widely known of all of them—consists of large floats that depict characters and themes from ancient Chinese and Japanese mythology, while its counterpart in Hirosaki features smaller floats that more nearly resemble painted folding fans. Naturally, the size and elaborateness of the festivals depend upon the time and funding available. Yet surprisingly for such a pervasive tradition, the origins of the festival itself are still hotly debated by historians. At the end of the evening, one of the members told me that even though Tsugaru City Nebuta had just finished, they would be starting work on the Horse Nebuta, scheduled to take place almost a month hence. The principle, I was told, was more or less the same, expect that in lieu of Chinese legends, the entries would feature stylized horses. If I wanted, he said, I should come back the next day and lend a hand.

I'm not one who needs two invitations, and before long

Yachinaka had become my group as well. Every night, I went to the hut and worked with the other members until the early hours of the morning. At first, I helped construct the rice paper skin to our gigantic horse. Though affixing a layer of paper seems mundane, I learned through experience that coaxing it into wire crevices while maintaining the curvature that gives the horse its dynamic texture is no simple matter. In fact, I learned a new meaning of the word "かゝんぱれ" ("Gambare") as I botched and re-worked countless sections of the skin. More importantly, though, I was able to see the immense pride these men and women take in their work. Even though my Tsugaru-ben was—and remains—abysmal, the unique identity of a Nebuta artist is visible in the friendship and work ethic that animates their craft. Through Nebuta, they do more than represent their hometowns and neighborhoods—they carry on a tradition far bigger than themselves.

These things are important anywhere in the world, but they have a special resonance in Tsugaru. As young people leave the area in search of a more urban lifestyle, the population of Tsugaru-ben speakers drops every year, and trained Nebuta artists are also in somewhat of short supply. Although my group is quite lively, there are relatively few young members—a worrisome thought to say the least. So it is that Nebuta artists have taken on a responsibility for preserving a unique sub-culture of Japan. Though it is a difficult job, there can be no doubts about its importance. Of the countless opportunities my community has given me, there is perhaps no higher honor than being allowed to help in this great task.

英語



JETプログラム参加者を支えるサポートシステム

～PA制度と地域での取り組み～

(財)自治体国際化協会業務部

外国語教育や国際交流への熱意に燃えて日本にやってくるJET参加者の多くは、母国の大学を卒業して間もない青年たちです。異国の地日本で、初めての社会人生活や一人暮らしを経験する参加者もたくさんいます。そんな彼らが、生活環境や文化の違い、理想と現実のギャップなどから様々なストレスを感じたり、カルチャーショックを経験し、多くの悩みに直面することは想像に難くありません。これらの状況が深刻なものにならないよう、JETプログラムではJET参加者等からの相談にのり、問題を解決に導くためのサポートシステムを設けています。

ここでは、JETプログラムのサポートシステムの概要と都道府県での取り組みについてご紹介します。

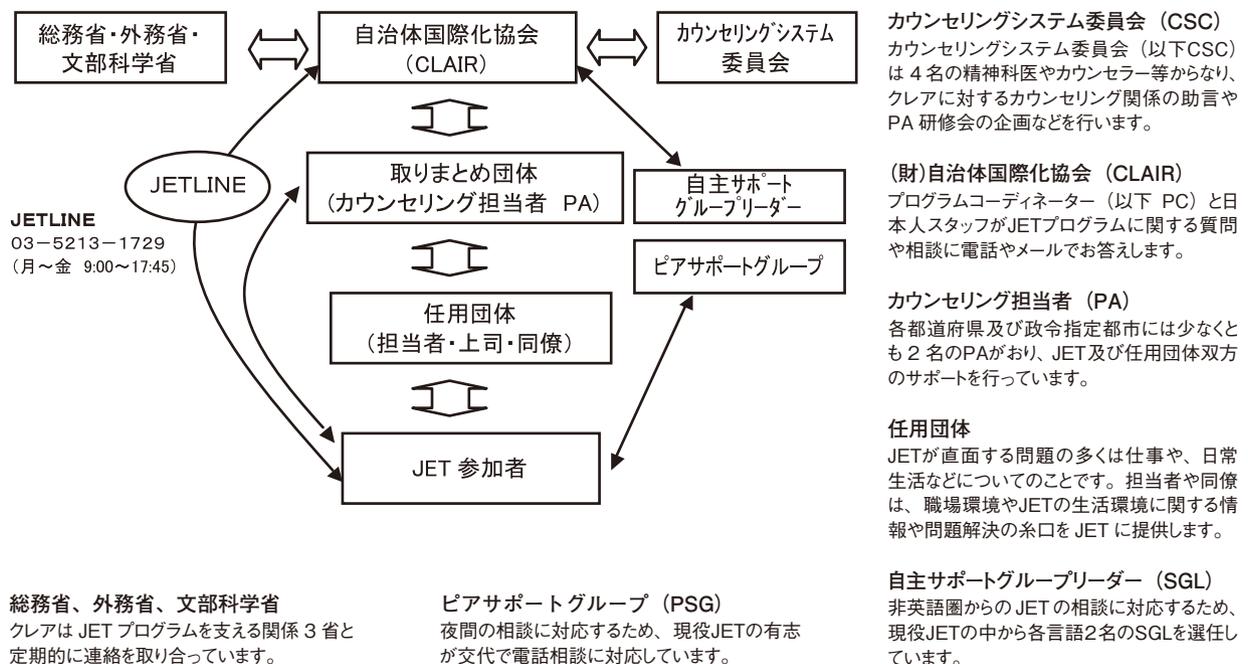
カウンセリング担当者 (PA) 制度

JETプログラムにおけるサポートシステムは、図のような体制で運営されています。

この体制の中核をなすのは、各都道府県、政令指定都市（取りまとめ団体）ごとに設置されたPA（Prefectural Adviser）と呼ばれるカウンセリング担当者です。

JET参加者にとって一番身近な相談相手は、毎

図 JETプログラムサポートシステム



日JET参加者と接している任用団体の担当者・上司・同僚です。しかし、任用団体とJETの間に問題が起きた場合や、担当者には話したくない心の悩みが生じた場合など、任用団体内での問題解決が難しくなることが多々あります。こんなときに、JET参加者と任用団体の間に立ち活躍しているのが、各取りまとめ団体のカウンセリング担当者（PA）です。

PAは、「JETプログラムカウンセリング担当者設置要綱」に基づき、各取りまとめ団体に日本人、JET参加者から各1名以上設置することとしており、JET参加者へのカウンセリング体制の充実を図っています。

PAの職務で最も重要な、JET参加者からの相談に直接対応するのは、主にJETPAの役割です。簡単な問い合わせや生活相談から深刻な病気の悩み相談まで多岐に及びます。JETPAの知識だけでは解決することが困難な場合、たとえば日本の習慣や職場に対する質問・疑問、法的な知識が必要な事案に対応する場合などには、日本人PAが支援します。

CLAIRでは、カウンセリングの基本理論や技法、PAの心構え、緊急事態対応等についての研修会を行い、PAの業務に役立つ知識や情報等を提供しています。

PAは、任用団体とJET参加者の仲介役であり、客観的な立場でカウンセリング、各種情報提供、緊急事態への対応等、様々な面から任用団体とJET参加者双方へサポートを行っています。JETと職場の間でトラブルが発生し、当事者同士では解決が難しくなったとき、PAが中立の立場でそれぞれの話を十分に聞き問題点を整理することは、事態を解決に導くのに大きな効果があります。

PAには、相談内容に関して守秘義務が課せられており、同じ職場の同僚でも彼らが行っている業務の内容を知らないといったことがよくありますが、JET参加者の活躍の影には、外から見えないPAたちの献身的な努力があるのです。

JETLINE

JET参加者が日常の悩みや疑問等を相談できるもうひとつの手段が、JETLINEです。CLAIRに専用の電話回線を設け、カウンセリング技術の研修を受けたPC（プログラム・コーディネーター：元JET参加者）が、参加者からの電話に直接対応しています。

昨年度の相談実績は、表のとおりです。

分類上、情報提供依頼と、深刻な悩み相談を含むカウンセリングとに分けています。件数の上では、情報提供の割合が多いですが、カウンセリングには深刻な事例もあり、1件の相談が数時間に及ぶこともあります。特に深刻な事例では、カウンセリングシステム委員会の助言を得たり、PAと連携することにより問題の解決にあたっています。

また、電話によるJETLINEの他に、メールによる相談にも対応しています。

日本人PAや団体担当者からの相談には、CLAIRの日本人スタッフが対応しています。

表 2009年度 JETLINE実績件数

情報提供		カウンセリング	
PA / SGLからの相談	130	職場	25
会議/行事	105	カウンセリング/紹介	23
申し込み/JET参加	28	PA / SGLからの相談	19
旅券/査証/許可証	27	ホームシック/鬱	17
語学講座	25	団体移動	17
JET傷害保険	23	再任用	16
年金	17	休暇（年休、病休等）	11
AJET	13	任用規則	10
再任用	12	契約不履行	10
税金	12	帰省	8
団体移動	10	運転/免許	7
医療/医師	9	帰国航空運賃	7
その他	172	その他	60
計	583	計	230

都道府県での独自の取り組み

JETプログラムのサポートシステムを円滑に機能させるため、取りまとめ団体ごとに地域の実情に合わせた様々な独自の工夫をして、きめ細かなサポートを行っている例があります。

■ 福島県

福島県では、日本人2名、外国人2名のPAを配置し、約150名の県内JET参加者に対応していますが、この他に、地域サポートリーダー制度を設けています。

県を7つの地域に区分し、各地域に1名の地域サポートリーダーを現役JET参加者の中から公募により選考して委嘱しています。委嘱期間は基本的に1年間です。これまでは、任期を8月から翌年7月までとしていましたが、前任者との引き継ぎをスムーズにするため、4月からの任期に変更する等、実状に合わせ改善されています。

地域サポートリーダーは、職務時間外における地域のJET参加者からの相談に応じる役割を与えられています。このため、携帯電話の番号やメールアドレスを公表して、JET参加者が気軽に連絡を取れるようにしています。難しいケースでは、県カウンセリング担当者への連絡相談の仲介を行います。

地域サポートリーダーは、県が招集するサポートリーダー懇談会に参加するほか、適宜、県のPAとメールや電話で情報交換を行っています。

また、新規来日者の福島オリエンテーションの運営協力や管内JET参加者への地域情報等の提供など、JETプログラムの運営全般に協力しています。

■ 青森県

青森県では、現在120名余りのJET参加者に対し、日本人PA 1名、外国人PA 2名で彼らのサポートを行っています。PAは例会を月1回行っており、県内巡回訪問や任用団体へのPA業務の広報等にも努めています。また、JET参加者の自

助ネットワークの形成促進として、青森県地域リーダー制度やBig Brother/Big Sister制度を設けています。

地域リーダー制度は、県内を5つの地域に分け、地域ごとに2名の地域リーダーを設置するもので、選出方法は、現地域リーダーの指名により、任期は1年間です。

地域リーダーは、地域内のJET参加者の支援、地域内でのコミュニケーションを図るイベント等の企画、新規JET参加者のサポート、新規青森オリエンテーションやALT中間期研修会のサポートなどを行っています。

青森オリエンテーションとALT中間期研修会の企画会議として年2回のミーティングを行うとともに、月1回、Skype（IP電話）を利用したミーティングを行っています。

Big Brother/Big Sister制度は、新規JET参加者が青森県での生活に慣れるまでの間、地域の先輩JET参加者が日常生活や仕事に関するサポートをするシステムです。新規参加者1名に対し、1～2名程度の先輩参加者を配し、居住地近辺の店舗の案内や友人ができるまで相談にのる等、まさに兄や姉のように新規参加者を身近で支える取り組みです。

*

ここでは、2県の取り組みを紹介しましたが、この他にも多くの都道府県や市町村が、地域リーダー制度や先輩システムといった同様の取り組みを行っています。問題が大きくなるのを未然に防ぐには、日常の身近なサポートが最も効果的であり、こうした取り組みは大きな成果が期待できます。

◇ JETLINE・JETMAIL (CLAIR)
TEL : 03-5213-1729
(月～金 9:00～17:45)
E-mail : jet@clair.or.jp

◇ ピアサポートグループ (AJET)
TEL : 050-5534-5566
(毎日 20:00～翌7:00)